

## 2022年 詩集

山 本 利 久

### ウクライナの危機

ロシア隣国ウクライナ  
東部に暮らすロシア人  
国境進出ロシアの大軍  
日々放映の演習模様



スラブ系のウクライナ  
クリミア戦争の起きた国  
2014年ロシア併合クリミア半島  
黒海望む要衝を

緊張走る内外に  
国防志願民兵に女性の姿散見も  
EU、NATO 米国の支援の動き活発に  
厳冬吹雪荒野を走る

西向き姿勢の鮮明な  
ウクライナ人の願望を  
させじと構えるプーチンに  
西への不信ありありと

覇権、ディール、同盟化  
北京五輪の最中に

思惑胸に両陣営  
武力を抑え外交に  
智恵と工夫を出し合って  
この難局を突破せん

パラリンピックを来月に  
凍てつく荒野東欧に  
花咲く山河の原風景  
平穏戻る日々を待つ

パソコンで一人聞く  
哀愁誘う民謡「鶴」  
雁行高く西目指す  
国土を守る兵士の  
黄泉(よみ)路飛ぶ姿かな

#### 参考資料(2)

23.2.19

### 志願兵ウラス

英国の名優ジェレミー・アイアンズがマリア・ステパノヴァのエッセイ「イチンの想像の産物としての戦争」を朗読したのは、2022年3月30日、ロンドン市内で行われた「ウクライナ難民のためのタベ」でのこと。マリアはそのエッセイをフィナンシャル・タイムズ紙に3月18日付で発表している。ロシアの侵攻からひと月と経っていない頃だ。

さすがはマリアだと感動するのと、その身の上を案ずる思いが同時に湧き上がる。さらにネットを追うと、侵攻が始まった時、たまたま米国の大学で講演していたことが分かった。ほっと胸を撫でおろすが、こんな文章を発表した以上、ロシアへの帰国は不可能だろう。家族とも離れ離れだろうか。

1972年モスクワ生まれ、詩人、作家、ジャーナリスト。国内外の数々の文学賞。彼女が創刊し主幹を務めるオンライン新聞「COLTA.RU」は毎月60万回の閲覧を集める。マリア・ステパノヴァについて僕が知っているのはそれくらいだ。あらためて、手元の英訳小詩集を開いてみる。

四元康祐

### 詩探しの旅

志願兵ウラス、死後2週間ルーブルの交換レートも、雀たちのお喋りも、自分の生まれ故郷も、忘れてしまった。

爆風のうねりが、彼の骨を抱きしめている。歳月が洗い流され、赤いほっぺの子供のころの彼が現れる。

この十字路に打ち棄てられたあなたが、ロシア人であろうとウクライナ人であろうと誰であろうと、ウラスのことを思い起せ。

彼はあなたよりも善良だった。

(「志願兵ウラス、死後2週間」全文)

なんと、今回の戦争を予言しているかのようではないか。おまけにT・S・エリオットの『荒地』の「水死」の本歌取りにもなっていて、歴史的な批評性を備えている。この詩を訳すにあたって彼女と連絡をとると、「自分でも驚いています。何年も前に書いた詩の意味がいまごろ明らかになるんじやう」。

現在家族とともにドイツにいますが、帰国の目途はないという。(詩人)

出所：日経 2023.2.19

## 春秋

若い世代の間で短歌がブームだとい  
う。1987年から続く東洋大学の「現  
代学生百人一首」には今年度、国内外  
から約6万6千首の応募があった。詠  
み人の多くが中学生、高校生だ。入選  
作を読めば、三十二文字に込められた  
10代の感性がまぶしく、少しうらやましい。

▼コロナ下での閉塞感をなげく歌の一方で、こ  
んな一首がある。「文化祭初の対面ミュージカ  
ル拍手はこんなに嬉しかったか」。日常が戻り  
つつある喜びがあふれ出る。「お父さん口きか  
なくてごめんない思春期とやらがきてしまっ  
たの」。作者は中学2年生。親への反発と感謝  
が交錯するのは世が移ろっても変わらない。

▼それにしてもなぜ短歌？ しばしば言われる  
のがSNS（交流サイト）との親和性だ。限ら  
れた文字にストレートな感情を乗せ、共感を得  
る。「個性を色濃く出すよう求められてきた世  
代にとって、ありのままの自分を受け入れてく  
れる短歌の温度感が心地よいのでは」。選考委  
員長を務めた高柳祐子准教授の分析である。

▼高柳さんによると、古典的な和歌の世界では  
目立とうとせず、誰からも非難されない表現が  
望まれる。そのためにも推敲を重ねる。古来の  
作法を心得ているのか、送られてきた作品の中  
に他者を傷つけるような歌は見当たらないそ  
うだ。言葉の刃が飛び交うネット空間でなく、歌  
道こそ人の本性が表れるのだと信じていた。

出所：日経

(了)